10/24 11/30

KOIZUMI Kazuhiro

Honorary Conductor for Life

終身名誉指揮者 小泉 和裕

東京藝術大学を経てベルリン芸術大学に学ぶ。1973年カラヤン国際指揮者コンクール第1位。ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、シカゴ響などに客演。新日本フィル音楽監督、ウィニペグ響音楽監督、都響指揮者／首席指揮者／首席客演指揮者／レジデント・コンダクター、九響首席指揮者、日本センチュリー響首席客演指揮者／首席指揮者／音楽監督などを歴任。現在、都響終身名誉指揮者、九響音楽監督、名古屋フィル音楽監督、神奈川フィル特別客演指揮者、仙台フィル首席客演指揮者を務めている。

Kazuhiro Koizumi studied at Tokyo University of the Arts and at Universität der Künste Berlin. After winning the 1st prize at Karajan International Conducting Competition in 1973, he has appeared with Berliner Philharmoniker, Wiener Philharmoniker, among others. Currently, he serves as Honorary Conductor for Life of TMSO, Music Director of Kyushu Symphony, Music Director of Nagoya Philharmonic, Special Guest Conductor of Kanagawa Philharmonic, and Principal Guest Conductor of Sendai Philharmonic.

© 堀田力丸

B Series

第841回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.841 B Series

サントリーホール

2017年10月24日(火) 19:00開演

Tue. 24 October 2017, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● 小泉和裕 KOIZUMI Kazuhiro, Conductor

ヴァイオリン ● アリーナ・イブラギモヴァ Alina IBRAGIMOVA, Violin

コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

バルトーク：ヴァイオリン協奏曲第2番 Sz.112 (39分)

Bartók: Violin Concerto No.2, Sz.112

Ⅰ Allegro non troppo
Ⅱ Andante tranquillo
Ⅲ Allegro molto

休憩 / Intermission (20 分)

フランク：交響曲 二短調 (40分)

Franck: Symphony in D Minor

Ⅰ Lento - Allegro non troppo
Ⅱ Allegretto
Ⅲ Allegro non troppo

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

シリーズ支援：明治安田生命

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Violin

Alina IBRAGIMOVA

ヴァイオリン

アリーナ・イブラギモヴァ

©Sussie Ahlburg

バロック音楽から委嘱新作まで、ピリオド楽器とモダン楽器の両方を演奏するアリーナ・イブラギモヴァは、ロンドン響、ウィーン響、ボストン響、クリーヴランド管、マリインスキー劇場管、エイジ・オブ・インライトゥンメント管などと、ハイティンク、ゲルギエフ、P. ヤルヴィ、ガーディナー、ヘレヴェッヘらの著名指揮者と共演。室内楽のパートナー、ティベルギアン（ピアノ）とはウィーンのムジークフェラインやザルツブルク音楽祭などに出演。2016年、大英帝国勲章MBEを授与された。

Performing music from baroque to new commissions on both modern and period instruments, Alina Ibragimova has established a reputation as one of the most accomplished and intriguing violinists of the younger generation. She has performed with orchestras including London Symphony, Wiener Symphoniker, Boston Symphony, Cleveland Orchestra, Mariinsky Orchestra, and Orchestra of the Age of Enlightenment under baton of conductors such as Haitink, Gergiev, P. Järvi, Gardiner, and Herreweghe. Ibragimova received an MBE in the 2016.

バルトーク：
ヴァイオリン協奏曲第2番 Sz.112

ヴァイオリン協奏曲第２番は、ベーラ・バルトーク（1881～1945）の創作がひとつのピークに達した1937年から38年にかけて作られ、1939年３月23日に、ゾルターン・セーケイ（1903～2001）のソロ、ウィレム・メンゲルベルク（1871～1951）指揮コンセルトヘボウ管弦楽団によって、オランダのヒルヴェルスムで初演されている。セーケイはバルトークと同郷のハンガリーの名手で、有名な《ルーマニア民俗舞曲》（1915年）のヴァイオリン／ピアノ編曲版を世に広めた。また《ラプソディ第２番》（1928年）はセーケイのために創作されている。

曲全体は、論理的、構造的なアーチ状の対称形を形づくっている。一例をあげれば、第１楽章で登場するいくつかの重要動機のひとつである12音音階風のもの（開始３分ほどの静かで神秘的な部分）は、第３楽章２分過ぎ付近の動機に対応する。このほかにも、曲全体には、相互の主題、楽章の配置、ひとつの楽章の中での音の配置にいたるまで整然とした幾何学的な配置が与えられていて、楽譜を検討してみると様々な発見がある。

もちろん、ただ耳で聴くだけでも、ヴァイオリン・ソロとオーケストラが渾然一体となった空前の音世界に陶酔できる。ヴァイオリニストにとって、この曲は自身の演奏技術と音楽性を存分に発揮できる作品。この曲が「いちばん好き」と公言する奏者も多い。

全体の調はロ（短／長）調。第１楽章は、冒頭部分のみ明確なロ長調が聴きとれる。第２楽章は３度関係のト調。終楽章はロ調と見なされる。いずれにしてもロ（H）音が全曲の基音で、その証拠に両端楽章はロ音を強調して閉じられる。

第1楽章　アレグロ・ノン・トロッポ　ハープに誘導されて６小節目からすぐにヴァイオリン・ソロが登場（第１主題）、以下ソロは全編にわたってほとんど休むことなく演奏し続ける。独奏者には、演奏テクニックと音楽性はもちろんのこと、体力、精神力が要求される。前記の12音的部分（第２主題）の後に続くソロの神秘的な美しさ、それを断ち切るオーケストラの***f***の騒音効果も素晴らしい。

ここから先、ソロは少しだけ休んで、曲は展開部に入り、冒頭のハープが戻ってくる。一瞬古典派のコンチェルトのように聴こえる全音階風の激しいパッセージなどを経て、再々度ハープによって冒頭部が帰ってくるところからが再現部。

後半にはニ（D）音周辺を、半音のさらに半分の音程である四分音（クォーター・トーン）で動き回る有名な箇所があり（虫の羽音や音揺れのように聴こえる）、このあとカデンツァに入る。終結の少し手前では、オーケストラの弦楽器が強烈な「バルトーク・ピチカート」を奏する。

第２楽章　アンダンテ・トランクィロ　静かに始まるが、後半部分でアレグロ・スケルツァンドになる部分が挿入され、通常のアンダンテ楽章とは少し趣が異なる。大きく見ると、全体は主題と7つの変奏、そして主題の再登場、という変奏形式になっている。

第３楽章　アレグロ・モルト　ソロの冒頭は第１楽章第１主題の変形。一息入れてからの第２主題も前記のように第１楽章の12音的動機から派生したもので、以下もそれに類似した動機やパッセージが現れる。半ばを過ぎてから、ソロが少しだけ休みになる箇所があり（このあたりはすでに再現部と見なされる）、バルトークお得意の、ジャズのビッグバンド的に金管を盛り上げる箇所を通って終結に至る。ソロは猛烈な難技巧を次々と繰り出すが、そうした間に、鳥の声や虫の羽音のように聴こえる部分が随所にあり、曲想が目まぐるしく変化する。

なおバルトークは、この楽章のエンディングを２種類残している。ひとつはほとんどの実演・録音で行われている形で、ヴァイオリン・ソロが最後まで残って高いロ音で終わるもの。これはセーケイが作曲者に要求して追加してもらった形である。もうひとつは、バルトークによる初案で、ソロが途中で終了、以下オーケストラだけによる1分半ほどの後奏があって終わる。本日は、近年少しずつ増えている初案の形によるエンディングが採用される。

（渡辺和彦）

作曲年代：1937～38年

初　　演：1939年３月23日　ヒルヴェルスム（オランダ）　ゾルターン・セーケイ独奏
ウィレム・メンゲルベルク指揮　コンセルトヘボウ管弦楽団

楽器編成：フルート２（第２はピッコロ持替）、オーボエ２（第２はイングリッシュホルン持替）、クラリネット２（第２はバスクラリネット持替）、ファゴット２（第２はコントラファゴット持替）、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、小太鼓、大太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、ハープ、チェレスタ、弦楽５部、独奏ヴァイオリン

フランク：
交響曲 ニ短調

ベルギー生まれ、フランスで活躍したセザール・フランク（1822～90）はサン＝サーンス（1835～1921）と同じく初めはオルガニストとして名声を得ていた。彼の生涯には劇的な事件がほとんどなく、作曲家としては典型的な大器晩成型の人だった。彼の唯一の交響曲であるこのニ短調は1886年から88年にかけて書かれた、60代半ばの作である。

この曲は「循環主題」をもとにした作品として知られている。また若きドビュッシー（1862～1918）が「転調する機械のようだ」と感想を書いたほどの頻繁で複雑

な転調と特異な楽曲構成のため、初演時は多くの専門家や聴衆を混乱させた。

第１楽章で「序奏＋第１主題部分」をそっくり反復し（しかもかけ離れた別の調で）、そのあとでようやく第２主題が登場すること、第２楽章が通常の交響曲の歌謡楽章とスケルツォを兼ねていること、そうした中で主題や動機の調配置がそれまでの交響曲の作り方からすると型破りなこと、など。

それでいて音の流れや響きは意外に自然で、敬虔な信仰の中に生きた作曲家の信条や情熱が感動的に表明されている。初演は「失敗」とされることが多いが、誠実なフランクは初めて耳にする自作の響きに大いに満足したという。

第1楽章　レント～アレグロ・ノン・トロッポ　ニ短調～ニ長調　前記のような変わった構成によるソナタ形式。登場する３つの重要主題は、「フランキスト」と呼ばれる弟子たちによって後に「祈りの動機」（序奏冒頭および主部第１主題）、「希望の動機」（第２主題／第１ヴァイオリンがなだらかに上下降する明るいメロディ）、「信仰の動機」（第３主題／第１＆第２ヴァイオリンと木管楽器群＆トランペットが高らかに奏するもの）などと呼ばれるようになった。そしてこの配置の中で、序奏のニ短調から複雑な転調技法を経過しつつ、音楽は最後に輝かしいニ長調へと到達する。展開部へ移行する部分で「信仰の動機」がホルン→オーボエ→フルートによって*pp*でゆったり歌い継がれる箇所はとりわけ美しい。

第2楽章　アレグレット　変ロ短調　中間部にスケルツォ的部分を挿入した緩徐楽章で、主部はイングリッシュホルンとハープ＆弦楽器群が美しい対話を続ける。中間部は弦が気ぜわしく動き回るスケルツォ的な部分で、その後少し明るくなってクラリネットがなだらかな変ホ長調のメロディを奏でる部分はトリオに該当する。そして再びスケルツォが帰ってくるのだが、そこから先は緩徐楽章とスケルツォが同時進行、イングリッシュホルンの動機がスケルツォ主題に乗って歌われる。

第3楽章　アレグロ・ノン・トロッポ　ニ長調の力強いフィナーレ。ファンファーレの後でチェロとファゴットが奏でるメロディは先の「信仰の動機」と関連がある。第２主題は金管が弱奏する荘重なワーグナー風のロ長調のもの。このあとロ短調に移って第２楽章のイングリッシュホルンの主題が再帰、以後はまた頻繁な転調を繰り返す展開部へ入り込む。再現部以降、全オーケストラが幾度も高らかに第１主題を吹き上げ、輝かしいニ長調で感動的に全曲を閉じる。

（渡辺和彦）

作曲年代：1886～88年
初　　演：1889年２月17日　パリ
楽器編成：フルート２、オーボエ２、イングリッシュホルン、クラリネット２、バスクラリネット、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、コルネット２、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、ハープ、弦楽５部

Hannu LINTU

Conductor

揮者 ハンヌ・リントゥ

フィンランド放送響首席指揮者。これまでにタンペレ・フィル芸術監督兼首席指揮者、RTÉ国立響（ダブリン）首席客演指揮者、ヘルシンボリ響およびトゥルク・フィル芸術監督を歴任。近年は、ロシアへのコンサート・ツアー、ヘルシンキ・フェスティヴァルにおけるライティオの歌劇『王女セシリア』、フィンランド国立オペラでのサーリネン振付によるシベリウスの《クレルヴォ》プロジェクトなど、フィンランド独立100周年を記念した一連の活躍が知られている。都響には2008年の初登壇以来4度目の客演。

Hannu Lintu serves as Chief Conductor of Finnish Radio Symphony. He previously held positions of Artistic Director and Chief Conductor of Tampere Philharmonic, Principal Guest Conductor of RTÉ National Symphony in Dublin, and Artistic Director of Helsingborg Symphony and Turku Philharmonic. Highlights of Lintu in recent years include a concert tour to Russia, a performance of Raitio's opera *Princess Cecilia* at Helsinki Festival, and a special collaborative project with director/choreographer Saarinen of Sibelius's *Kullervo* at Finnish National Opera, as part of Finland's centenary celebrations.

©Kaapo Kamu

P Promenade

プロムナードコンサートNo.375

Promenade Concert No.375

サントリーホール

2017年11月3日(金・祝) 14:00開演

Fri. 3 November 2017, 14:00 at Suntory Hall

指揮 ● ハンヌ・リントゥ Hannu LINTU, Conductor

ヴァイオリン ● ヴェロニカ・エーベルレ Veronika EBERLE, Violin

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op.61（43分）

Beethoven: Violin Concerto in D Major, op.61

Ⅰ Allegro ma non troppo
Ⅱ Larghetto
Ⅲ Rondo: Allegro

休憩 / Intermission（20 分）

シベリウス：交響曲第2番 ニ長調 op.43（44分）

Sibelius: Symphony No. 2 in D Major, op.43

Ⅰ Allegretto
Ⅱ Tempo Andante, ma rubato
Ⅲ Vivacissimo
Ⅳ Finale: Allegro moderato

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：フィンランド大使館、東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
（舞台芸術創造活動活性化事業）

文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演（青少年を年間500名ご招待）協賛企業・団体はP.75、募集はP.78をご覧ください。

YOUNG SEAT ヤングシート

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Violin

Veronika EBERLE

ヴァイオリン

ヴェロニカ・エーベルレ

南ドイツ生まれ。アナ・チュマチェンコらのもとで研鑽を積む。わずか17歳でラトルの指名でザルツブルク復活祭音楽祭に登場、ベルリン・フィルとベートーヴェンの協奏曲を共演。以後、世界の主要オーケストラ、著名指揮者に招かれているだけでなく、室内楽でもフォークト、R. カプソンらと共演を重ねる。稀有な才能と安定感のある成熟した技術は、世界中から賞賛されている。都響とは初共演。使用楽器は日本音楽財団から貸与されたストラディヴァリウス「ドラゴネッティ」（1700年製）。

Veronika Eberle's exceptional talent and her poised and mature musicianship have been recognised by many of the world's finest orchestras, venues and festivals, as well as by some of the most eminent conductors. She was born in Donauwörth, Southern Germany. Her introduction by Simon Rattle to a packed Festpielhaus at 2006 Salzburg Easter Festival, in a performance of Beethoven concerto with Berliner Philharmoniker, spurred her international career. Eberle plays the "Dragonetti" Stradivarius (1700), on generous loan from the Nippon Music Foundation.

ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op.61

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770 ～ 1827）にとって、1806年は実り多い年であり、ピアノ協奏曲第４番ト長調op.58や《ラズモフスキー》の愛称で知られる３曲の弦楽四重奏曲op.59、それに交響曲第４番変ロ長調op.60と、いくつもの大作が完成されている。ヴァイオリン協奏曲ニ長調op.61は、同年11月から12月にかけて、非常に短い期間のうちに一気に書き上げられた。

この作品は、アン・デア・ウィーン劇場のコンサートマスター兼指揮者として活躍していたフランツ・クレメント（1780 ～ 1842）のために書かれた。一般的なヴァイオリン協奏曲と比べてヴァイオリン独奏において高音域が目立って多く使用されているのは、クレメントが楽器の最高音域の演奏に秀でていたためである。とはいえアクロバティックな技巧をひけらかすような書法は一切見られず、独奏と管弦楽は密接に呼応し合って、壮麗な音楽を繰り広げる。

初演は1806年12月23日にウィーンで行われた。ベートーヴェンの作曲が遅れたために、オーケストラには十分なリハーサル時間がなく、またクレメントもほとんど譜読みの時間がとれず、初見に近い状態で演奏にあたったという。独奏者が華やかな技巧を披露する協奏曲に慣れた当時の聴衆にとっては見せ場に乏しく、かつ長大なために、初演後は演奏機会に恵まれなかった。しかし、ヴァイオリンの歴史に名を残す伝説的な名手ヨーゼフ・ヨアヒム（1831 ～ 1907）が、1844年に弱冠13歳でこの作品をフェリックス・メンデルスゾーン（1809 ～ 47）の指揮下で演奏し、大成功を収めたことで再評価され、多くのヴァイオリン奏者が採り上げるようになった。

第1楽章　アレグロ・マ・ノン・トロッポ　ソナタ形式による。ティンパニがニ音を４回叩いて木管による第１主題を呼び出す冒頭は、２つの意味で画期的といえる。１つは、従来彩りに過ぎなかったリズム楽器のティンパニが重要な役割を担っている点であり、もう1つは、この単純な同音連打が楽章全体を統一する主要動機として機能する点である。

直後に提示される第１主題と、やはり木管楽器に始まる第２主題は同じニ長調をとり、共に穏やかで抒情的な性格を持つため、通常のソナタ形式のように２つの主題が強い対比を描かず、むしろ協調して楽章の気分を決定づける。２つの主題の提示が終わるとヴァイオリン独奏が登場し、提示部の大部分をなぞるようにして音楽を進める。展開部は２つの主題とティンパニの動機を素材とする長大なもので、その後、再現部にいたり、ヴァイオリンのカデンツァを経て終結を迎える。

第２楽章　ラルゲット　変奏曲の形式を採り、冒頭、管弦楽で提示される詩情

豊かな主題が、いくつかのエピソードを挿みつつ3回にわたって変奏される。独奏と管弦楽の交わす繊細な対話が美しい。終結部にはヴァイオリンのカデンツァが入り、休みなく終楽章に移行する。

第3楽章　ロンド／アレグロ　ロンド形式。強い躍動感を前面に出した主題に始まる。活気あふれる気分は楽章全体にいきわたり、ヴァイオリン独奏も大いに活躍する。２つのエピソードを挿むロンドは、ヴァイオリンのカデンツァを経て晴れやかに終わる。

（相場ひろ）

作曲年代：1806年11月～12月23日
初　　演：1806年12月23日　ウィーン　フランツ・クレメント独奏
楽器編成：フルート、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン２、トランペット２、ティンパニ、弦楽５部、ヴァイオリン独奏

シベリウス：交響曲第2番 ニ長調 op.43

“森と湖の国”フィンランドが生んだ国民的大作曲家ジャン・シベリウス（1865～1957）。彼の交友録の中でも、1900年に知遇を得たアクセル・カルペラン男爵（1858～1919）は、いわゆるパトロンとして重要な存在だった。シベリウスの音楽に心から共感を寄せた、少し風変わりな性格の独身貴族は、自らがさほど裕福ではなかったのに、友人連中からお金をかき集めては毎季の“出資”を続けてくれた人物である。

1900年10月にシベリウスが家族を連れて、翌年春にまで及ぶ長期旅行に出かけたのも、カルペランの勧めによるものだった。まずベルリンに身を落ち着け、年が明けてからイタリアへ。ジェノヴァ近郊の保養地ラパッロ、次いでローマに滞在し、帰路の途中でフィレンツェへ立ち寄る。その過程で彼は多くの霊感を授かり、ドン・ファン伝説に基づく《管弦楽のための音詩》や、ダンテの『神曲』による作品などのスケッチがなされた。

フィンランドへ戻り、夏から秋にかけて机に向かったシベリウスの筆から、最終的に生まれ落ちたのが交響曲第２番。上記のスケッチからは、特に第２楽章へ様々な素材が転用されている。この楽章が一編の交響詩にも似た波瀾万丈の様相を呈しているのも、その辺に理由が求められそうだ。さらにいえば、第４楽章の第２主題には、彼が帰国を果たした矢先に自殺してしまったエッリ・ヤルネフェルト（愛妻アイノの姉）に抱く思いが影を投げかけていると、しばしば指摘がなされる。

しかしこうした事象も、いわゆる絶対音楽としての自律性を与えられたシンフォニーの総体を前にすれば、二次的な問題に過ぎまい。曲は1901年12月に完成し、出版譜には“アクセル・カルペランヘ”と献辞が掲げられた。

第1楽章　アレグレット　ソナタ形式。冒頭部では春の息吹にも似た弦楽器の動機に誘われ、木管楽器とホルンが牧歌的な第1主題を歌い交わす。第1・第2ヴァイオリンがユニゾンで提示する副主題と、たたみかけるようなピッツィカートの音形に導かれて登場する第2主題は、いずれも長く延ばす音がメロディの最初に配されており、これはシベリウス好みの旋律作法である。

第2楽章　テンポ・アンダンテ、マ・ルバート　低音弦楽器の導入楽句に続き、前述の《音詩》に由来する主要主題をファゴットが提示。コラール風の副主題は弦楽器の弱奏で姿を現す。以上2つの主題から派生した要素がテンポも様々に変動させながら、幻想味も豊かに展開されていく。

第3楽章　ヴィヴァーチッシモ　主部は弦楽器の目まぐるしい走句に木管楽器の断片的なモチーフが対置されるスケルツォ。歩調を緩めたトリオでオーボエが先導する主題も“シベリウス節”の典型例だ。主部が再現された後にトリオの主題が回帰を果たすと、次第に音勢を増しながら雄大に盛り上がり、切れ目なく次の楽章へ流れ込む。

第4楽章　フィナーレ／アレグロ・モデラート　整然としたソナタ形式による終楽章。第3楽章終わりの推移句から続く雄渾なリズム動機を従えた第1主題は、力強くも人生肯定的な口調が印象的だ。前述の第2主題が提示部では深い哀感と共に歌い継がれ、再現部ではいったんピアニシモにまで音勢を落とした後、激しい感情の昂りを見せていく。最後をしめくくるのは第1主題を用いた輝かしいコーダ。

（木幡一誠）

作曲年代：1901年
初　　演：1902年3月8日　ヘルシンキ　作曲者指揮
楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、弦楽5部

A Series

第842回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.842 A Series

東京文化会館

2017年11月8日(水) 19:00開演

Wed. 8 November 2017, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● ハンヌ・リントゥ Hannu LINTU, Conductor
メゾソプラノ ● ニーナ・ケイテル Niina KEITEL, Mezzo-Soprano
バリトン ● トゥオマス・プルシオ Tuomas PURSIO, Baritone
男声合唱 ● フィンランド・ポリテク男声合唱団 The Polytech Choir, Male Chorus
合唱指揮 ● サーラ・アイッタクンプ Saara Aittakumpu, Chorus Master
コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

シベリウス：クレルヴォ交響曲 op.7 (70分)

Sibelius: Kullervo, op.7

Ⅰ	Allegro moderato	導入部
Ⅱ	Grave	クレルヴォの青春
Ⅲ	Allegro vivace	クレルヴォと彼の妹
Ⅳ	Alla marcia	戦いに赴くクレルヴォ
Ⅴ	Andante	クレルヴォの死

本公演に休憩はございません。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：フィンランド大使館、東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
文化庁

公益財団法人アフィニス文化財団 Affinis ETIQUETTE

フィンランド独立100周年 Suomi Finland 100

演奏時間は予定の時間です。

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Mezzo-Soprano

Niina KEITEL

メゾソプラノ

ニーナ・ケイテル

©Heikki Tuuli

ヘルシンキのシベリウス・アカデミーを卒業。ダルムシュタット州立劇場、マンハイム国立劇場、フィンランド国立オペラで『エフゲニー・オネーギン』オルガ、『ばらの騎士』オクタヴィアン、『カルメン』タイトルロールなどを歌った。2014年にフリーとなり、パリ国立オペラ、フランクフルト・オペラ、サヴォンリンナ・オペラ・フェスティヴァルなどに客演。演奏活動に加え、レミ音楽祭（フィンランド）では芸術監督を務めている。

After graduating Sibelius Academy in Helsinki, Niina Keitel performed such roles as Olga (*Eugene Onegin*), Octavian (*Der Rosenkavalier*), and Carmen (*Carmen*) among others in Staatstheater Darmstadt, Nationaltheater Mannheim, and Finnish National Opera. Since 2014 she has become a freelancer. In addition to her career as an opera and concert singer, Keitel is Artistic Director of Lemi Music Festival in Finland.

Baritone

Tuomas PURSIO

バリトン

トゥオマス・プルシオ

©Eino Pursio

ヘルシンキのシベリウス・アカデミーで学び、1996年、ライン・ドイツ・オペラのメンバーとして国際的なキャリアをスタート。エアフルト劇場を経て2002年からライプツィヒ・オペラに所属、『カルメン』エスカミーリョ、『フィガロの結婚』フィガロ、『トスカ』スカルピアなどを歌った。これまでにベルリン州立歌劇場、フィンランド国立オペラ、グライドボーン音楽祭、サヴォンリンナ・オペラ・フェスティヴァルなどで活躍している。

Tuomas Pursio studied at Sibelius Academy. In 1996, he started his international career as a member of Deutsche Oper am Rhein in Düsseldorf. Since 2002 Pursio has joined ensemble of Opernhaus Leipzig, and has sung roles including Escamillo (*Carmen*), Figaro (*Le Nozze di Figaro*), and Scarpia (*Tosca*). He has appeared at State Opera Berlin, Finnish National Opera, Glyndebourne Festival, and Savonlinna Opera Festival, among others.

Male Chorus

The Polytech Choir

男声合唱

フィンランド・ポリテク男声合唱団

1900年に設立されたフィンランドの男声合唱団で、メンバーは主にヘルシンキ工科大学の学生および卒業生で構成されている。レパートリーはロマン派から現代音楽まで多岐にわたる。彼らは毎年10〜15回の公演（クリスマスや春のコンサートなど）を行い、国内外のオーケストラ（フィンランド放送響、フィルハーモニア管など）と定期的に共演している。2013年以降、芸術監督および指揮者をサーラ・アイッタクンプが務めている。

PK (The Polytech Choir) is a Finnish academic male choir, founded in 1900. Singers are mostly students and graduates of Helsinki University of Technology. The choir regularly joins forces with leading orchestras both in Finland and on tour abroad, and performs some 10-15 times every year. Since 2013, Saara Aittakumpu has been Artistic Director and Conductor of the choir.

Chorus Master

Saara AITTAKUMPU

合唱指揮

サーラ・アイッタクンプ

2013年、フィンランド・ポリテク男声合唱団の芸術監督および指揮者に就任。彼女は合唱指揮の修士号をもち、ラハティ・バッハ合唱団とカーリ・アンサンブル（女声合唱団）も指揮。メトロポリア応用科学大学、タンペレ応用科学大学、ヘルシンキ音楽院で合唱指揮を教えている。2015年の第5回アントン・ブルックナー国際コンクール&フェスティヴァル（オーストリア）で指揮者賞を受賞した。

Saara Aittakumpu has been Artistic Director and Conductor of the Polytech Choir since 2013. She holds a Master's degree in music with a major in Choral Conducting. She also conducts Bach choir of Lahti and Kaari-ensemble. Aittakumpu has also taught choral conducting at Metropolia University of Applied Sciences, Tampere University of Applied Sciences, and Helsinki Conservatory of Music.

シベリウス：クレルヴォ交響曲 op.7

近代フィンランド音楽を代表する国民的作曲家、ジャン・シベリウス（1865～1957）が若き日に精魂こめて書いた全５楽章の大作《クレルヴォ交響曲》は、フィンランドの民族叙事詩『カレワラ』第31～36章に登場するクレルヴォの物語を、独唱２人・男声合唱とオーケストラで描いた、70～80分に及ぶ作品だ。

歌われる物語は、重い。――若く強靱な青年クレルヴォが旅の途上で出逢い誘惑した娘……しかしそれは生き別れの妹だった。悲嘆のすえ川に身を投げて死ぬ妹。クレルヴォも一家の仇敵と闘い、復讐を遂げたのちに自らの命を絶つ……。この悲劇を、青年作曲家シベリウスの荒々しくも大胆な（演奏不能の域というべき無茶な箇所も多々ある）筆致で、ずしりと手応えの深い（しかし生き生きとした！）音楽がたっぷりと描き出している。

まだ知られざる存在だったシベリウスの名を一気にフィンランド楽壇に轟かせた《クレルヴォ》、その誕生に至る経緯を少したどっておこう。

フィンランド的なるもの

ヘルシンキ音楽院を卒業してベルリンとウィーンに留学したシベリウスは、ワーグナーやブルックナーなど多くの作品演奏に接して強烈な刺激を受けつつ、反動のように〈フィンランド的なるもの〉にも強く惹かれていった。フィンランドの先輩ロベルト・カヤヌス（1856～1933）がベルリン・フィルで自作の《アイノ交響曲》を指揮するのを聴き（1890年）、その曲が題材としていたフィンランドの民族叙事詩『カレワラ』の魅力に開眼したことも大きかっただろう。

創作の道を模索していたシベリウスは、ドイツ・オーストリア音楽の重要なジャンルである〈交響曲〉の作曲へ挑戦を始める。はじめは、フィンランド民謡に基づく変奏曲を終楽章においた全４楽章の交響曲を構想していたようだが（創作の経緯については神部智『シベリウスの交響詩とその時代　神話と音楽をめぐる作曲家の冒険』〔音楽之友社／2015年〕に詳しく、本稿も多くを依拠したことを記し感謝申し上げたい）、書き進めては頓挫し……を繰り返しているうちに、ベートーヴェンの交響曲第９番《合唱付》の演奏を聴いて衝撃を受ける（1891年4月）。そのインパクトがいよいよ、民族叙事詩『カレワラ』に基づく《クレルヴォ》の創作を決意させた。

叙事詩『カレワラ』は、フィンランド各地で吟唱詩人たちによって伝承されていた豊富な民族詩・歌謡を熱心に収集したエリアス・リョンロット（1802～84）が、1830

年代からその成果をまとめて出版したもの。この本が明らかにしたフィンランド文化の豊饒は、ロシア支配下で高まっていた民族意識に火をつけることにも繋がった。シベリウスもこの『カレワラ』から着想を得た作品を長きにわたって書き続けるが、その端緒が《クレルヴォ》ということになる。

初演の圧倒的成功と作品の封印

しかし挑戦は難航した。予定されていた期日近くになっても書き上がらないどころか後半楽章の構成すら決まらず、初演は延期。ようやく実現した1892年4月の世界初演も惨憺たる演奏だったという。作品を理解できなかった演奏家たちは練習初回から嘲笑で迎えた、と初演のソプラノ歌手が回想しているが、大急ぎで作られた楽譜の不備、作曲家自身の不慣れな指揮……と悪条件ばかりが揃っていた。――にもかかわらず、音楽は満場の聴衆を圧した。若き作曲家による『カレワラ』を題材にした大規模な新作初演、ということ自体が当時のフィンランドでは大事件だったのだ。これこそが我々のフィンランド音楽だ！　という絶賛が続々と発表され、若き作曲家シベリウスの名は轟いた。

しかし、数回の再演ののちシベリウスはこの曲を封印する。改訂も試みるが、生前、遂に果たすことはない。彼は『カレワラ』を題材にした作品を発表し続けたが、それは《クレルヴォ》の荒い挑戦を封じた上で切り拓いた、新たな道の先に響く音楽だった。――この曲が再び世に現れるのは、作曲家が亡くなった翌1958年の全曲蘇演からだ。

作品は全5楽章から成る。

第1楽章　アレグロ・モデラート　冒頭楽章は**「導入部」**、ソナタ形式によるオーケストラのみの音楽だ。中低弦の暗いうねりに乗せて、クラリネットとホルンに現れる第1主題はクレルヴォを象徴する。力強い緊迫感に満ちた第2主題とともに幻想的な展開が物語の導入を豊かに描き……。

念のため物語の前提をご説明しておくと――ウンタモ一族に滅ぼされたカレルヴォ一族の生き残りであるクレルヴォは、復讐を恐れたウンタモによって殺されそうになるが、超人的な力で死なず生き残る。彼は鍛冶屋イルマリネンのもとへ奴隷として売り払われ苦労を重ねるが、逃れて荒野をさまよううちに、自分の家族が実は生き延びていることを知る（皆殺しだったのでは……というあたりは神話らしい矛盾）。

第2楽章　グラーヴェ　**「クレルヴォの青春」**はオーケストラのみで奏される緩徐

楽章。中間部では夢幻のなかにも軽妙な雰囲気が印象的だ。

第3楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ　「クレルヴォと彼の妹」は声楽陣とオーケストラを総動員した25分近い長大な楽章。輝かしくはずむような4分の5拍子による前奏から、曲は物語の進行に従って自由に進む。

男声合唱が力強いユニゾンで歌い始め、橇（そり）で旅するクレルヴォが荒野で金髪の乙女と出逢う情景を描く。乙女を誘うが拒まれたクレルヴォは再び馬に鞭をあて、第2の乙女を誘うがまた断られる。そして第3の乙女と出逢い……クレルヴォは彼女を橇に引きずり込む（ここで合唱はユニゾンからハーモニーへ）。乙女の哀願にもかかわらず、豪華な贈り物や金銀で誘惑を続けるクレルヴォは欲望を遂げる。ところが、男女ふたりの独唱が互いの素性を明かし合い……乙女はクレルヴォの実の妹であることが知れる。クレルヴォは絶望の叫びをあげる（妹が急流に身を投げて死ぬ場面は省かれている）。

シベリウスが敢えて（復讐譚ではなく）兄妹の性的関係という禁忌を作品の軸として描いたこと、それに伴う歌詞の変更……など、ウィーン世紀末文化などとの関係は前掲『シベリウスの交響詩とその時代』を参照されたい。

第4楽章　行進曲調で　「戦いに赴くクレルヴォ」はオーケストラのみのスケルツォ楽章。クレルヴォは悲劇の元凶であるウンタモ一族に復讐するため、戦いへ出発する（総譜でこの楽章の前に置かれた『カレワラ』からの引用はP.38を参照）。

第5楽章　アンダンテ　「クレルヴォの死」では男声合唱がクレルヴォの最期を歌いだす。ウンタモ一族を滅ぼしたクレルヴォは、故郷に戻り森をさまよう。実の妹と過ちを犯した場所に戻ったクレルヴォは、激しい悔恨に苛まれながら、剣で胸を突き死を選ぶ。……クレルヴォのテーマが再現され、壮大なクライマックスが全曲を閉じる。

（山野雄大）

作曲年代：1891～92年

初　　演：1892年4月28日　ヘルシンキ　作曲者指揮　ヘルシンキ・オーケストラ協会
エミー・アクテ（ソプラノ）　アブラハム・オヤンペラ（バリトン）　男声合唱団

楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2（第2はバスクラリネット持替）、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、トライアングル、シンバル、弦楽5部、独唱（ソプラノ、バリトン）、男声合唱（テノール2部、バス2部）

第843回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.843 C Series

C Series

東京芸術劇場コンサートホール

2017年11月30日(木) 14:00開演

Thu. 30 November 2017, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● 小泉和裕 KOIZUMI Kazuhiro, Conductor

ヴァイオリン ● 堀米ゆず子 HORIGOME Yuzuko, Violin

コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

モーツァルト：交響曲第35番 ニ長調 K.385《ハフナー》（17分）

Mozart: Symphony No.35 in D major, K.385, "Haffner"

Ⅰ Allegro con spirit
Ⅱ Andante
Ⅲ Menuetto
Ⅳ Finale: Presto

ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲第1番 ト短調 op.26 （24分）

Bruch: Violin Concerto No.1 in G minor, op.26

Ⅰ Vorspiel: Allegro moderato
Ⅱ Adagio
Ⅲ Finale: Allegro energico

休憩 / Intermission（20 分）

R.シュトラウス：交響詩《ドン・ファン》 op.20（17分）

R.Strauss: Don Juan, op.20

R.シュトラウス：交響詩《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》 op.28（16分）

R.Strauss: Till Eulenspiegels lustige Streiche, op.28

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
（舞台芸術創造活動活性化事業） 文化庁

協賛：株式会社シャトレーゼ

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Violin

HORIGOME Yuzuko

ヴァイオリン

堀米ゆず子

1980年にエリーザベト王妃国際音楽コンクールで日本人初の優勝を飾って以来、世界一流のオーケストラ、アーティストとしばしば共演。2013年からイタリア、2014年からイギリスでマスタークラスを開催。日本でも多くのプロジェクトを手掛ける。2016年より仙台国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門審査委員長に就任。現在、ブリュッセル王立音楽院教授、マーストリヒト音楽院教授。使用楽器はヨゼフ・グァルネリ・デル・ジェス（1741年製）。

Yuzuko Horigome was born in Tokyo. In 1980, she won the 1st Prize at the Queen Elisabeth Competition, heralding the beginning of a hugely successful international career. In 2016 she was Chairperson of Violin section at Sendai International Music Competition. Currently, Horigome is Professor at Koninklijk Conservatorium Brussel and the Music Department of Maastricht University. She plays the Joseph Guarneri del Gesù (1741).

モーツァルト：
交響曲第35番 ニ長調 K.385《ハフナー》

ザルツブルクの富豪ハフナー家はモーツァルト家と親しく、1776年にヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756 ～ 91）にセレナーデを1曲（《ハフナー・セレナーデ》K.250）依頼したことがあった。1782年7月、当主のジークムント・ハフナー2世（1756 ～ 87）が貴族に叙せられることとなり、その祝典のために、モーツァルトは再びセレナーデの依頼を受けた。当時、彼は歌劇『後宮からの誘拐』の上演や自らの結婚準備などもあって多忙を極めていたが、依頼された作品を8月7日には完成させる。この2つめのセレナーデを基に、おそらく楽器編成などに若干の変更を加えて書かれたのが、交響曲第35番《ハフナー》である。

機会音楽であり、多くの場合、野外で演奏することを前提としたセレナーデは、娯楽を目的とし、作曲者自身も軽んじていたと誤解されがちである。しかし、慶事に多くの聴衆を得て演奏されるセレナーデについて、モーツァルトを含む当時の作曲家は自らの力量の宣伝に格好の場として力作を書くことがしばしばであり、他方、演奏会において披露される交響曲も、後のベートーヴェン作品などとは異なり、大衆的な娯楽性と無縁ではなかった。そのために同じ多楽章構成をとるセレナーデと交響曲を隔てる境界線は曖昧であり、一度演奏したらお払い箱とされることの多いセレナーデを交響曲に仕立て直すのは、モーツァルトにとって自然なことであったろう。

第1楽章　アレグロ・コン・スピーリト　2オクターヴの跳躍とバロック音楽的な付点リズム、極端な強弱の対比など、華やかで個性的な性格を持つ主要主題の提示と共に開始される。第2主題とおぼしき部分は性格が弱く、支配的な主要主題による単一主題のソナタ形式と解釈されることが多い。

第2楽章　アンダンテ　祝祭的な気分と劇的な緊張のない交ぜとなった第1楽章に対し、第2楽章は温和な雰囲気に満ちたソナタ形式の楽曲となっている。のどかな性格の2つの主題が提示され、展開部として置かれたごく短いエピソードを経て再現部となる。

第3楽章　メヌエット　力強い足どりを思わせるメヌエットと、優美な和声に彩られたトリオが強い対照を成す楽章である。

第4楽章　フィナーレ／プレスト　ロンド・ソナタ形式による。強い推進力にあふれる第1主題は、歌劇『後宮からの誘拐』第3幕にあるオスミンのアリア「おお、何という大勝利」冒頭のヴァイオリンの旋律に似ている。より落ち着いた性格の第2主題が提示された後にあらわれる展開部では、2つの主題は短調へと転調されるのが印象的である。再現部の後、華やかなコーダと共に全曲が締めくくられる。

（相場ひろ）

作曲年代：1782年７～８月、1783年３月
初　　演：1783年３月23日　ウィーン　作曲者指揮
楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン２、トランペット２、ティンパニ、弦楽５部

ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲第1番 ト短調 op.26

マックス・ブルッフ（1838～1920）はドイツの音楽家である。ドイツやヨーロッパ各地で指揮者として名声を博し、ベルリン音楽院の教授となるなど教育にも力を入れた。作曲家としては、多数の合唱曲のほか、オペラ、管弦楽曲、協奏曲、室内楽曲などあらゆるジャンルの作品を手掛けており、叙情に満ちたロマン的な作風を特徴としている。

ブルッフの作品の中でも特によく親しまれているのが、このヴァイオリン協奏曲第１番である。ブルッフのロマン的特質を端的に表した作品で、情感に満ちた旋律の美しさ、表情豊かな和声、ヴァイオリンの特性を生かした華麗さといった点で、ドイツ・ロマン派を代表するヴァイオリン協奏曲の1つに数えられる傑作だ。形式的にもロマン派らしい自由な発想が見られ、その中で感情の起伏に溢れる展開が繰り広げられている。

作曲は1864年から始められ、一度完成をみて1866年４月24日にコブレンツで初演されたが〔独奏はオットー・フォン・ケーニヒスロウ（1824～98）〕、ブルッフはその後作品に手を加え、その改訂稿は1868年1月7日にブレーメンで初演された。この時、独奏を受け持ったのが大ヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒム（1831～1907）であった。この改訂稿が決定稿となって、以後はその形によって演奏されている。

第1楽章　前奏曲／アレグロ・モデラート　最弱音のティンパニと木管による導入に続いて、ヴァイオリン独奏が最低音から高音へと向けて上行するという短い序奏に始まる。主部は、重音を生かした力強い第１主題と叙情的な第２主題を持つ提示部の後、展開部となるが、再現部では序奏だけが再現されて、そのまま次の楽章へ。

第２楽章　アダージョ　ロマンティックな主題で開始される変ホ長調の美しい緩徐楽章で、次第に感情的な高まりを示していく。

第３楽章　フィナーレ／アレグロ・エネルジコ　ソナタ形式によるト長調のフィナーレ。独奏ヴァイオリンによる重音の舞曲風の第１主題と高らかに奏される第２主題を中心に、変化に富む華麗な発展が織り成されていく。

（寺西基之）

作曲年代：初稿／1864～66年
改訂稿／1867～68年
初　　演：初稿／1866年４月24日　コブレンツ
改訂稿／1868年１月７日（異説あり）　ブレーメン
楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、ティンパニ、弦楽５部、独奏ヴァイオリン

R.シュトラウス：交響詩《ドン・ファン》op.20

ドイツ・ロマン派の最後の巨匠と称されるリヒャルト・シュトラウス（1864～1949）は最初期にはソナタや室内楽曲などの古典ジャンルの作品を書いていたが、マイニンゲンの宮廷楽団の副指揮者を務めていた時期に、ここのコンサートマスターのアレクサンダー・リッター（1833～96）の影響でリストやワーグナーなど新ドイツ派の音楽に開眼し、標題音楽やオペラに惹かれるようになる。彼がまず目を向けたのが標題音楽である交響詩で、彼はこのジャンルの創作に力を注ぐようになる。

彼の交響詩で最初に着手されたのは《マクベス》だったが、その最終的な完成が遅れる間に、1887年から翌年にかけて作曲された交響詩《ドン・ファン》が彼の記念すべき交響詩第1作として先に世に出ることとなった。

この作品の題材となったのはニコラウス・レーナウ（1802～50）の詩「ドン・ファン」だった。ハンガリー生まれのオーストリア人レーナウは、暗い情熱と深い憂愁のうちに世界苦を歌い上げたロマン的な叙情詩で人気を得た詩人で、彼の「ドン・ファン」は、次々と女を自分のものにしていく好色漢としての従来のドン・ファン伝説と異なり、永遠なる理想の女性を求めてついに果たすことができない英雄としてドン・ファンを描いている。

そうしたロマン派らしい理想主義的なドン・ファン像を、シュトラウスは巧妙な管弦楽法を駆使しつつ、交響詩として音化した。交響詩処女作であるにもかかわらず、激しい情熱から暗いメランコリー、濃厚な官能までをも表し出す多彩な響きと、いくつもの示導動機による巧緻な構成とでもって詩の内容を迫真的に描出するその手腕には、交響詩作家としてのシュトラウスの類い稀な資質がはっきり示されている。

曲は、理想を求めて出発するかのような勇ましい上行主題で始まる。すぐ続いてヴァイオリンに雄々しい颯爽とした主題（やはり上行のベクトルが特徴）が示されるが、これがドン・ファンの第1の主題である。曲の前半はこの主題が何度か回帰する間に女性との愛の情景を描く官能的なエピソードを連ねていくという形で進行する。

そして曲の中ほどでドン・ファンを示す第2の主題がホルンに勇壮に現れると、音楽はさらに力を増して渦巻くような激しさのうちに発展、しかしその頂点で勢いを断ち切るように不協和音が出現して音楽の流れは止まり、女性（愛）を示す既出の諸主題が絶望的に回想される。それでも今一度ドン・ファンは立ち上がるが（自らを鼓舞するかのようなドン・ファンの2つの主題）、結局力尽き、総休止の後、彼の破局を示すコーダで曲は暗く寂しく閉じられる。

（寺西基之）

作曲年代：1887～88年
初　　演：1889年11月11日　ヴァイマル　作曲者指揮
楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、ハープ、弦楽5部

R.シュトラウス：交響詩《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》op.28

交響詩の名作で知られるシュトラウスだが、実は彼が交響詩作家だった時期は長い生涯の中の比較的短い期間にすぎない。彼が残した交響詩は7曲だが（実質は交響詩でありながら交響曲と題された後年の《家庭交響曲》《アルプス交響曲》を除く）、それら7曲は1886年から98年までのわずか13年ほどの間に集中的に書かれているのだ。

しかもその間にも、1889年の《死と変容》の後、5年ほどの交響詩創作の空白期間がある。5年のブランクの大きな理由は、彼がこの時期、初のオペラ『グントラム』の作曲に力を入れていたことによる。ワーグナー崇拝者の彼にとって念願だったオペラ進出を成功させるために、『グントラム』に全力を注いだわけだが、その初演は大失敗に終わり、シュトラウスはオペラのジャンルから一時的に離れ、再び交響詩へと戻る。

こうして1894～95年に交響詩《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》が書かれるわけだが、実はシュトラウスは当初これもオペラとして構想していた。ドイツの伝説的な悪戯者ティル・オイレンシュピーゲルの物語に基づき、自身台本を書き始めたのだが結局うまくいかず、交響詩にすることになったのである。

シュトラウスの交響詩としては初の4管編成をとるこの作品に対し、彼は「ロンド形式による昔の無頼漢の物語に基づく」と記した。“ロンド形式による”というのは主人公ティルを表す2つの主題が何度も回帰するからだろうが、構成的には古典的な意味でのロンド形式とは程遠い。しかし生き生きした楽しさ、明快さ、諧謔性といった古典派時代のロンドの精神に通じるものがこの作品には息づいている。

標題内容は楽譜には記されていないが、シュトラウス自身による詳しい説明が残されており、主人公ティルが様々な悪戯を連ねた後、最後に絞首刑になるという物語が描かれている。その概略は以下のとおり。

――昔々、悪戯者があったとさ（前奏）。それはティル（ホルンの示すティルの第1の主題）という名の横道者（クラリネットが示すティルの第2の主題。前奏の動機に由来）。心浮き立って悪戯に出掛けた彼は、馬で市場を混乱させ、僧に変装して説教したと思うと、騎士になって娘に求愛し拒絶されて人類への復讐を宣言、学者に論戦を挑むがかなわぬと見て逃げ出し、小唄を口ずさんで闊歩する。しかしついに捕えられ裁判の結果、処刑される（死の動機）。こうして物語はおしまい（前奏の再現）、しかし彼の自由な精神は永遠である（2つのティル主題）――

ティルの引き起こす数々の事件や死刑の場面を描くリアルな音画的手法はまさにシュトラウスの面目躍如たるものがあり、また序奏として「悪戯者があったとさ」という前口上を、そして結尾に「物語はおしまい」を意味するエピローグを置くといった、あたかも昔話を聞くような設定にした構成も巧みである。

（寺西基之）

作曲年代：1894～95年

初　　演：1895年11月5日　ケルン　フランツ・ヴュルナー指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート3、オーボエ3、イングリッシュホルン、小クラリネット、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、ガラガラ、弦楽5部